
月の記憶＊仏前の開花編＊

kaguya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の記憶*仏前の開花編*

【Nコード】

N7323Y

【作者名】

kaguya

【あらすじ】

月の記憶シリーズ第二弾！今回もラッキー爺さんのラブ&コメディー&ちよつとミステリアスな高校生活をご覧ください！

*名前も知らない初恋の相手、いきなり現れる許嫁！？まさかの同棲生活！！友達以上の三角関係…これは友情？同情？恋愛感情？

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。

初めて読まれる方は、先に「月夜の序曲編」を読まれた方がより物語を理解できるかと思います。

白の崑崙花00（前書き）

白の崑崙花。こんろんかプロローグ的な感じです。

崑崙花、ご存知ですか？白の花弁がキャンバスに見えますよね。ちなみに花言葉は神話とか神秘とか、そんな感じです。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。
当然フィクションです。登場する個人、団体：以下省略。

白の崑崙花〇〇

私の運命——。

もし花のように美しいなら、あなたの傍で咲き誇るでしょう。
もし花のように儚いのなら、ただ肅として散りゆくでしょう。

あなたのその目に映るなら、身を焦がし、花を散らせましょう。
あなたのその目に留まる時、燦爛たる姿で舞うでしょう。

月のように輝けるのなら、彼方からあなたを照らしましょう。
月のように輝けない私は、此方よりあなたを見守り続けたい。

*

五月中旬——。

早いもので富士見商業高校ふしみしょうぎょうこうに編入して一ヶ月が経とうとしていた。

富士見商業高校について少し説明を。

富商の通称で呼ばれるこの高校は、小、中、高、エスカレーター式の学校で、ここの生徒は大きな会社の子供だったり、財閥の子供だったり——まあ、すごいこと。

そんなすごい生徒たちに紛れる超一般人である俺、竹本光たけもとひかるは今日も十分たらずの通学路を歩いていた。

富商は説明した通り小、中、高、一貫の学校で、高校入試なんてものはない。その代わりと言うか、中学三年の夏に一度だけ編入試験なるものがあり、俺は去年の夏にその試験を受けた編入生。

中学の時はその試験のために勉強、勉強、勉強の毎日。交友、部活動、恋愛——そんなものとは無縁すぎる生活だった。

そのせいあってか若干のコミュニケーション障害。
はあ、なんと勿体ない三年間だったんだろう…。

しかし、もとよりそんなに良くなかった成績を学年二位まで上げた俺はもう少し褒められてもいいはずだ。

友達も作らずに勉強ばかりしていたにもかかわらず、そんな俺よりも成績がよかったやつがいる。土御門とかいう気持ちの悪いやつだ。

その土御門も俺と同じく富商の編入試験を受け、さらにはほぼ満点の点数で編入を決めるといふ変態ぶり。

そしてこいつは中学時代で唯一友達……と呼べるやつだ。残念ながら。

さて紹介的なものはこの辺で終わりにして話を元に戻そう。

現在五月中旬、朝はまだ冷え込み通学路を歩く俺はベージュでチエック柄のズボンのポケットに手をつ込み、俯きがちな体勢で、かつ早歩き気味に学校へ向かっていた。

いつもは気にしないし目にも留めないバス停——。

富商近くのそのバス停で今まさにバスから降りてきた小さな少女に、俺は目を奪われた。

寒さも忘れて立ち止まり、その小さな少女を目で追う。

身長は150センチより低いと思う。かなり小さい印象だ。艶のある綺麗な黒髪を肩のラインで切り揃え、その綺麗な黒髪が包むのは白すぎる肌の小さな顔。切れ長の目に瑞々しい桜色の唇。

可愛い、というよりも“綺麗”という言葉の方がしっくりくる。これでロングヘアだったなら和美人って印象だったかもしれないな。

彼女はベージュでチェック柄のスカートに紺のカーディガンを着ていて、そのことから俺と同じ富士見商業高校の生徒だということがわかる。

初めて見る人だった。

まだ通い始めて一ヶ月つてところだし、知らないのも無理ないか。同じクラスの生徒も未だに顔と名前が一致しないし。

中学の頃は女の子に興味を持ったことはなかったのだからないが、もしかするとこれが“恋”という感情なのか？

大人びた彼女の顔を見ると心臓がすぐドキドキする。俗に言う一目惚れ？いやまさか。

「よつす！」

「ひよつ！？」

「おお、キミはなかなかユニークな驚き方をするんだね、えへへ」
あの小さくて綺麗な少女を目で追っていると、死角から明るい声をかけられた。

声の主は下から俺を覗きこむようにしてニコニコ笑っている。

「なんだよいきなり…」

「いやー、隣のクラスのキミを見かけたからついね。あたし御石衣、どうぞよろしくー」

御石衣みいしころもせさんは、えへへ、と笑いながら手を差し出してくる。

あ、握手…？

「照れない照れない、ほらっ！」

そう言つて御石さんは俺の手を取った。その瞬間女の子特有の柔らかい感触が…。

おっほん…。御石さんは大きな目を細くして笑っている。

「ところで、キミの名前はなんて言っんだい？一組の人ってのはわ

かるんだけどね」

邪魔なのかお洒落なのかはわからないが、御石さんは長い髪を後ろで一つに結っていて、それが馬の尻尾のように動いている様は彼女の元気の良さを表しているようだった。じゃじゃ馬…いやなんでもない。

御石さんと話しているうちにあの小さくて綺麗な人は見えなくなっていた。

「俺は竹本光——つと、そんなことより、そろそろ歩き出さないとかヤバくないか？時間」

「おおっ！でもちよつと用事思い出しちゃったよ。あたしは走るからキミも急ぎなよ！」

少年のように元気な御石さんは、今度は女の子っぽく笑ってそのまま走って行った。

彼女、御石衣との出会いから、真っ白だった俺のキャンバスは鮮やかな色で埋め尽くされる。

白の崑崙花 01 (前書き)

ここからは*月夜の序曲編*のプロローグ後の話になります。先にそちらをお読みください。

白の崑崙花 01

五月の終わり頃のこと。ある日の休日――。

「新しいお洋服が欲しい、なんて思うわね」

「へえ、そんなこと思うのか」

「お買い物に行きたい、なんて思うわね」

「へえ、そんなこと思うのか」

「……………怒るわよ」

「……………ごめんなさい」

朝、だらしくソファ―に横たわり流れているテレビをなんとなく見ていると居候の月野かぐやが綺麗な顔で俺を見下ろしていた。

バス停のところで御石と出会った日、そこで見かけた超絶美少女である月野かぐや。彼女は実は俺の従兄妹で、しかも親同士が決めた許嫁だった。おまけに俺とかぐやの両親は現在海外旅行中。ここ竹本家で生活するのは俺とかぐやだけというわけだ。

それなんてエロゲ？ってな話だが、こいつはまあ性格の悪いことはつきり言って色っぽい話には絶対にならない。断言できる。

しかし見た目は綺麗で名前も“かぐや”ときたもんだ。これってあのかぐや姫を意識してるよね？男という男を虜にしたとかいうあの…。俺のあだ名は爺さんだったのに、お姫様はお前かよ。

「お小遣い減らすわよ」

可愛らしいフリフリブラウスと短いスカートにニーソという、お出かけする気満々のかぐやは冷酷な目で俺を睨んでいる。寒くないのか？

この居候のかぐや。現在竹本家の家計を牛耳っている。俺の母さんから約一年分の生活費やら何やらが入った通帳を預かっていて、

どうして俺に預けなかったんだよ母さん、という不満もたらたら。かぐやは、世界的に有名な月野ブランドの一人娘であり超金持ち野郎なのだ。ちなみに従兄妹の俺は普通の家庭。

月野ブランドは主に女性向けのファッションブランドで、化粧品や香水なんかもある。そしてとにかく値段が異常。

かぐやは外見、内面とも大人びているし落ち着いている。二人で暮らすようになってから料理、洗濯、家事全般をこなしてくれる。確かに俺より金の管理はできるだろう。

「わかったよ、着替えてくるから待ってろ」

小遣いは減らされたくないからな。

「急ぎなさいよ」

「へいへい」

口の減らないやつだ。

しかし、この完璧すぎる容姿のかぐやにも欠点がある。極度の人見知り――。

対人恐怖症とまではいかないが友達はずゼロ。言ってしまう俺以外に話せる相手はいない。

それなのに新しい服が欲しいだとか？見せるやつなんていないくせに。ひよつとすると密かに好きなやつでもいるのかも。

俺も中学まではかぐやと同じで友達と呼べるやつはいなかった。土御門は置いておいて。

でも富商に編入してからは五人も友達ができた。内心かなり嬉しい。

五人とは――まず御石衣。みいしころも明るくて、目がキラキラ大きくて、ポニーテールで、そして胸がボインだ。御石はかぐやと同じ一年二組。

次に玉枝龍と子安燕。たまえだりゅう こやすつばめ こいつらはとにかく細くて背が高い。モデルさんみたいな体型。

一年三組の龍は身長180センチを超えていて、いつも微笑んでいて爽やか。おまけにイケメン。

一年四組の燕は俺と同じ身長170センチ。女にしては背が高い。なんていうんだろう、ギャル系？まあ、そんな感じだ。髪は栗色で巻き髪だし、俺の苦手なタイプ。

四人目は月夜見零。つきよみしずく こいつはとにかく口うるさい。俺と土御門と同じ一年一組で、しかも俺の隣の席。生徒会の役員でクラス委員。立派なもんだけど頭は悪い。背は低く150センチくらいかな、そしてツインテール& amp ;まな板ペツタンコ。

五人目は——月野かぐやだ。

あいつはどう思っているかわからないが、俺は少なくとも友達と思っている。間違っても婚約者なんて思っていないから。

*

かぐやと二人、やってきたのは月野ショップ。

バスで三十分ほどのところにあるこの大きな建物はどう考えても月野ブランド系列店。

「あのさ、買い物はいいけどなんでここ？」

「安くしてくれるの」

「……そっすか」

まあ、月野の庭みたいなもんだしな。

しかし俺が言いたいのはそんなことではない。

ここ女の客しかいねーじゃん。完全にアウェイだよ！

「何をしているの？早く行くわよ」

「お、おう……」

ゴクリと生唾を飲んで——いざ、女の園へっ……！

白の崑崙花02

店内に入ったかぐやがまず向かった先は化粧品コーナー。お前服
買いに来たんじゃなかったのかよ。

当たり前だけど男性客は俺だけ。かなり息苦しい。いや実際女の子のいい匂いでいっぱいなんだけどね——って俺は何を言っているのだろうか。

「これ、どう思う？」

そう言いながらかぐやが見せてきたのは“夏の新カラーだよメイクアップパレット！”お値段26250円だ。

「に、二万！？いやほとんど三万じゃねーか！！しかもまだ夏じゃねーし！！！」

「恥ずかしいわね、大きな声出さないで」

「はっ……！」

周りの人たち、たぶん女子高生とか女子大生、若い人たちが俺の方を見てクスクス笑っていた。

ピンク色のキラキラした箱をかぐやは手にとって真剣に見ている。お前は可愛い系より綺麗系が似合うと思うぞ。というか可愛い系と似合わねーよ。

「お前さ、いつも化粧とかしてたっけ？」

「女の子は誰でも化粧くらいするものよ」

「お前は女の子ってタマじゃないけどな。それにしても無駄だと思うけど」

「なんですって？」

「ひいっ！」

そんな目で睨むなよ……。

化粧なんてしなくても十分綺麗なんだけど、とは言えないな。

というか化粧って肌に悪いんだろ？せっかく肌綺麗なのに十五歳からそんなピンクとか紫とか塗りたくっていたら年取った時に肌ぼろぼろなんぞ。

ここ化粧品コーナーにはメイクアップ用とかスキンスケ用とかよくわからないものばかりがずらりと並んでいて、正直男の俺には興味の無いものばかりだった。まあ、女物ばっかだし。

しかも、しかもだ。値札に書かれている数字、明らかにゼロ一個多いだろ。これでよく潰れないよな、月野ブランド。潰れるどころかかなりの黒字らしいし。

「あなたならどっちを選ぶ？」

悩みに悩んだかぐやは俺に意見を聞いてきた。

今手に持っているのはパールピンクのチークが二種類。ぶっちゃけ容器以外で違いがわからん。

「俺ならどっちを選ぶって言われても…。そもそも俺はこんなもん買わないし——ん！？」

目に入っただのは値段だ。一万円もするやつがあるかと思えばもう片方は三千円。

「一体なにを悩んでんだよ。三千円の方選ぶに決まってるだろ、常識的に考えて」

一万のやつは三倍長持ちなのか？違うだろ？だったら三千円の方選べよ。

「じゃあこっちにしようかしら」

そう言って一万円の方を買い物がこにそつと入れた。

「なんで！？俺の意見無視！？」

「そつ、無視」

「——つておい！なにこそつと“夏の新カラーだよメイクアップパレット！”もかごに入れてるんすか！それ三万円だからね！？合計四万だからね！？」

「女の子はお金がかかるの」

「そうじゃねーだろ！いやそうかもしれないけど！そっちに同じようなやつが五千円であるじゃねーか！」

「うるさいわね…。ガールフレンドのショッピングくらい黙って付き合いなさい」

「———What!？今なんと…」

俺日本語しかわからないからガールフレンドとかショッピングとか難しい言葉使わないで。

「彼女」

「……One more」

「嫁」

「ちよつと変わった……って、どういうこと？彼女!？嫁!？」

「だって私たちは婚約者同士でしょ？だから今は恋人」

「なんてこつたい」

俺は知らないうちにこいつと付き合っている設定になっていたのか…。

近くの麗しいマダムたちが「あらあら、彼氏さんも大変ねー」とか言っちゃっている。お前ら旦那が汗水流して働いた金で高級品買ってんじゃねーよ。悪口言って本当にごめんなさい。

———と、今は知らないおばさんたちに八つ当たりしている場合ではない。

「俺たちって……付き合ってたの？」

「あら、違うの？」

「違うよー！」

「そう………」

その時のかぐやの顔は寂しげで、悲しげで———。

もしかすると親同士が決めた婚約のために精一杯俺のことを好きになる努力をしてくれていたのかもしれない。

そりゃあこんな冴えない男と結婚なんて願ひ下げだろう。それにかぐやは絶世の美少女だし、十年後、二十年後なんてどえらい美人さんになっていることだろう。

そのかぐやが親同士の口約束程度で俺なんかと一緒に住むなんて可哀そうだ。

——— って、なんだよこのシリアス展開。

「さて、次はお洋服よ」

「まだ買うのかよ！」

誰もが振り返るような美貌を振り撒くかぐやは少し首を傾げてみせると俺を見て微笑んだ。

今すでに四万円だろ？金持ちの金銭感覚はどうなってんだよ。

「はい」

「その手はなんでしょうか」

「私に荷物を持たせる気？」

「いやそれお前が買うもんだろ」

買い物かごを持ってと言わんばかりにそれを俺に押し付けてくる。

「いい男は黙って女の手を取るものよ」

「意味わからないし」

「いいから持ちなさい」

「うぐぐ…」

渋々かごを持つ俺。

「はい」

「……その手はなんでしょうか」

今度は空いた手を差し出してくる。

もう荷物持っていないじゃん。

「手を繋ぎましょう」

「はい！？」

「あなたが迷子にならないように」

「却下！だって人いっぱいいるし！ていうか人がいなくても手なんて繋げないよ！」

「恥ずかしいの？」

「そういう意味じゃねーよ」

手を繋ぐなんて何考えてんだよ。マジ勘弁だつて。

かぐやを置いて歩き出すと、「残念だわ」とか言っつてついてきた。何が残念なんだよおい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323y/>

月の記憶＊仏前の開花編＊

2011年11月23日19時47分発行